



図1 結城廃寺出土遺物の集合写真
 (埴仏・塑像・舍利孔石蓋・刻書文字瓦)



図2 塔心礎・舍利孔石蓋の俯瞰(1/3)・立面写真
 左列：五弁蓮華文様の記録を意識 右列：石蓋加工痕跡の記録を意識



図3 塑像右脚部と蓮華座の表裏立面写真
 上段：立体形状で造形を表現 下段：粘土の接合痕跡で製作技術を表現

(1) 結城廃寺の調査概要

結城廃寺は、8世紀前半に創建され10世紀頃の焼失・再建を挟んで15世紀中頃まで存続した法起寺式の伽藍配置を持つ古代地方寺院です。1988年から1996年にかけて8次にわたる発掘調査が行われ、2022年には史跡公園整備を目指した調査が再開されました。先の調査では、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の研究員10数名も関わっており、石蓋や埴仏類は奈文研の写真技師が撮影しています(斎藤1999)。しかし年月が経ち、現在の学術目的に応えきれない部分も出てきました。そこで、同機関所属の筆者が受け継ぎデジタル撮影を行いました。

(2) 高精細写真

高精細写真とは、撮影者の配慮が細部まで行き届いているものです。調査対象遺物の全体像がどのような性質と特徴を有するものであるか？見る側にひと目で把握させる力を持つのは、図1の集合写真でしょう。写真には立面と俯瞰の撮影方法がありますが、1枚の写真で立体感や存在感を表現しながら遺物の全容についても詳しく伝えたい場合は、立面の集合写真が適しています。

(3) 意識し、表現すること

考古学で写真を用いる目的は、質感・形状・雰囲気・臨場感を記録することです。ただ、考古学研究は時代とともに

に進化します。例えば金工品の研究では「形態や文様、装飾など‘かたち’を基準に分類していた段階から、製作技術や彫金など‘かたち’をつくりだす‘技術’の追求に進展しており、写真で記録する意識や表現もそうした知見に応えるために変化しています。(諫早・栗山2018)。

図2の石蓋写真は、文様と加工痕を撮り分けたものです。両者の違いは、石蓋に描かれた蓮華文を注視するか(左)、石蓋製作技術まで見るか(右)です。報告書には文様を重視した俯瞰写真(左上)だけが掲載されています。しかし、それだけでは石蓋の厚みを伝えることができないため、今回は立面も撮影しました。さらに石蓋の加工痕を記録する

ため、ライティングを変えた右列写真を撮影しています。

図3も上記の考え方の延長上にあたるものです。通常の立面撮影では、造形を重視して表面の立体形状を表現(上)します。しかし、塑像がどのような工程を経てその‘かたち’に至ったかという点も写真で記録すべきです。そこで観察に基づいて製作技術を復元し、工程の痕跡を陰影で表現したものが下段写真です。つまり、写真で製作技術を表現することは、実測図を描くのと類似した行為でもあるのです。

引用文献

斎藤伸明 1999 『結城廃寺』 結城市教育委員会

諫早直人ほか 2018 『古代東北アジアにおける金工品の生産・流通構造に関する考古学的研究』